

九人研雑感 : アマチュアリズムとプロフェッショナル リズム

大谷, 裕文
西南学院大学 : 教授

<https://doi.org/10.15017/2338950>

出版情報 : 九州人類学会報. 30, pp.15-17, 2003-07-05. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :

九人研雑感—アマチュアリズムとプロフェッショナルリズム—

大谷 裕文
(西南学院大学)

筆者の記憶では1972年の秋に、綾部恒雄、江淵一公、内藤莞爾、永井昌文などの諸先生をはじめとする多くの先輩諸氏の並々ならぬご尽力によって、文化人類学、自然人類学、考古学、日本民俗学、言語学など様々な分野の研究者、及びこういった分野に関心をもっておられる一般の方々からなる九州人類学研究会が誕生した。そして1973年に、初の九人研会報（創刊号）が発行された。この九人研会報の創刊から起算して、本年は30年目の大きな節目に当たる年である。この間、九人研が、紆余曲折を経ながら何度も危機を乗り越えて、ともかく今日

まで存続し、ささやかではあるが九州地区の文化人類学と隣接諸科学の研究に一定の貢献をしてきたことを心から喜びたいと思う。

今、過去30年にわたる九人研の歩みを振り返ってみるとき、九人研の創設時から繰り返し論じられてきたことで、現在の九人研の運営にも関わる重要な問題が幾つかあることに気がつく。本稿では、これらのなかで最も基本的と思われる問題—アマチュアリズムとプロフェッショナルリズム—について思い浮かぶことを述べてみたい。

今日、アマチュアという言葉の使用には、

否定的な意味が伴っていることが多い。それは、「まだ、アマチュアの域を脱していない」、「単なるアマチュアとしては立派だ」、あるいは「私はアマチュア音楽家にすぎない」といった言説の中に見て取ることができるであろう。こういった言説は、明らかに、アマチュア活動の達成度（結果）に対する否定的評価をはらんでいる。人類学の領域においても、19世紀の後半に、多くのアマチュア人類学者の中から学問的達成とキャリアを志向するプロフェッショナル人類学者が析出されていく過程のなかで、アマチュア人類学者に負のイメージが付与されていった。しかしながら、アマチュアの活動の達成度が、プロフェッショナルのそれと比較して、常に劣っているというわけではない。この点は、今日の日本に、プロ顔負けのアマチュア天文学者、アマチュア・スポーツ選手、アマチュア画家、アマチュア小説家、アマチュア音楽家、アマチュア陶芸家、アマチュア歌人、アマチュア俳人などが少なからずいるという事実からも明らかであろう。何れにしても、アマチュアの活動を達成度あるいは結果とリンクさせる見方は、アマチュアの潜在的な創造力を適切に理解する上で、あまり生産的ではないといえるであろう。

アマチュア活動の肯定的側面を見るためには、活動の結果ではなく、当該活動に対するアマチュアの取り組み方（モチベーションと態度）に目を向ける必要がある。ニュージーランド・リンカーン大学の哲学者スタン・ゴドゥローヴィッチによれば、アマチュアは、熱愛者（amator）という語に由来し、アマチュアの真骨頂は、ある活動に向けての意気込み（enthusiasm）にあり、良質なアマチュア会員の参加は、その成果が厳しい査定に晒される学会のようなプロフェッショナルな団体の活力を推し量る指標であるという。九人研も、創設から

しばらくの間、このような意味での優れたアマチュア会員を擁し、活発な情報交換の場として地域社会の中で大きな役割を果たしていた。筆者自身も、小説家夢野久作の子息で、オーストラリアやインドで砂漠の緑化事業を手がけながら、ヨーロッパの博物館の研究を続けておられた故杉山龍丸氏や世界各地で開発プロジェクトを展開してこられた内田義弘氏などから貴重な情報を頂いたことをはっきりと記憶している。

九人研は、30年前の創設当時から、日本民族学会の地区別研究会として同学会の財政援助を受けており、地区別研究会としては関東地区研究会および近畿地区研究会に次ぐ歴史と規模を有する「正規」の学術団体である。したがって、九人研が「正規」の学術団体として人類学研究の達成度を上げるために打ち出してきた様々な方策は、本来の軌道（プロフェッショナリズム）に沿った極めて正当な努力であった。しかしながら、この過程の中で、創設時からの優れたアマチュア会員の姿が徐々に見られなくなっていくことは、やはり残念な事実であると言わねばならない。

九人研のような学術団体の運営において、プロフェッショナリズムとアマチュアリズムの妥協点をどこに見いだすかという案件は、解決の見通しが容易に立たない問題の一つである。九人研の運営委員は、筆者も含めて、この問題についてこれまで何度も討議を重ね、妥協点を求めて苦闘を続けてきた。このような苦闘の一端は、九州人類学会報の序文や編集後記、あるいは九州人類学研究会事務局からのお知らせに表れている。例えば、平成2年8月22日付けの九人研事務局からのお知らせは、「さて、去る6月16日の九人研総会におきまして、平成2年度の事業計画が審議されましたが、その際、例会の出席者数が減ってきていることに話題が及び、解決策として例会の持ち

方を思い切って変えることになりました」という書き出しで始まり、解決策の具体的な内容として、「例会の回数をこれまでの年10回から5回に減らす」、「(レベルアップのために) 例会発表にコメンテーターを付ける」、「(4月にレベルアップのための) 西日本宗教学会との共同シンポジウム」を開く、「例会会場を中央市民センターや福大セミナーハウスなど、九大以外の場所にして、一般の人にも参加しやすいようにする」などの方策が打ち出されている(丸括弧内の補足とアンダーラインは筆者)。容易に両立しないプロフェッショナリズムとアマチュアリズムを何とか妥協させようとする苦勞を、上述の引用文から読み取って頂ければ幸いである。

近年、人類学のみならず、地理学、社会学、歴史学、哲学などの分野で、社会の流動化に対するアマチュアリズムの潜勢力に着目する議論が活発になっているが、九人研にとって、このテーマは、単なる一般論

としてではなく、解決すべき切実な問題として重要性を増してきている。というのは、ゴドゥローヴィッチが指摘するように、良質なアマチュアリズムの躍動は、学術団体の活力を維持するために必要不可欠であるからである。プロフェッショナリズムを基調とする九人研のなかに、どのように良質なアマチュアリズムを取り込んでいくのかという問いに対して、筆者自身、説得力のある回答をもっているわけではないが、九人研の会員あるいは会員ではない参加者の方々から御教示を賜りながら、この問題について引き続き考えていく所存である。最後になったが、今年の九人研3月例会の会場で久しぶりに内田氏の元気な姿をお見受けした。この喜ばしい出来事から判断すると、現在の九人研はかなり良い方向に向かっているのではないかと思われる。筆者も一運営委員として、九人研の更なる発展を心より願うとともに、微力ながらその一助になればと思っている。